

1. 授業の基本情報

本授業は、小学校サブコースを専攻している学生を主な対象に開講されている、専門教育選択科目(小学校教育拡充科目・教育臨床科目)である。日々目まぐるしく変化し、新しい施策が次々と取り入れられる学校現場において、授業づくりの本質を見極めつつ、学習者である子どもたちを真ん中に据えて、授業を構成し実践していくことは今後ますます必要になってくる。本授業は、各教科の指導法の授業などで学んだ基礎的な理解と技術をさらに磨き、応用できる力を育成する目的で設定されている。そのため3回生を主な対象としており、今年度は前学期の授業として開講されたが、これまでで一番多い20名が履修した(3回生19名、4回生1名)。

3回生前期は、小学校サブコースで学んでいる学生にとっては、9月に控える本学部附属小学校での4週間に及ぶ教育実習の直前の時期でもある。本授業は卒業や免許取得のための必須科目ではないが、小学校サブコースに在籍するおよそ6人に1人が履修したことからも、教育学部で学ぶ学生の「授業づくり」に対する意識の高さと教育実習に懸ける思いの強さの表れであると感じた。実際、授業の最後に毎回記入させるリフレクションシートには「教育実習で自信をもって授業ができるように力を付けたい。」「今回の講義で学んだことを実際に実習で試したい。」などの言葉が多く見られたことから窺い知ることができた。そのような学生の思いや期待に応えるべく、なるべく実践に即した授業内容になるように心がけて実施した。

2. 授業評価・授業研究の内容

① 授業研究の内容について

本授業では、上述した目的を達成するため、とりわけ次の2点を強く意識して、カリキュラムを編成・実施し、具体的な成果を得ることができた。

一点目は、なるべく多くの授業を観て学ぶこ

とである。授業づくりは実際の授業を観る中で授業観や子ども観、教材に対する見方などが養われる。講義でいくら専門的な知識を身に付けても、それが実際の授業でどう活かしているのかを自分の目で見て確かめなければ、その理解さえ覚束無い。そのため、本授業では、授業や授業づくりの本質、最新の学習科学の知見から見出された深い学びの在り方に関する講義など、必要な基礎的理論や知識に関する授業を行った後、実際の学校現場に出向き、授業を見学する時間を設けていた。しかし、今年度もコロナ禍において対面授業が制限される事態が起こり、第1クォーターは遠隔授業をせざるを得なかった。その際、同期型(ZOOMを使用)、非同期型(Moodleによる講義動画視聴)を併用して授業を実施したが、愛媛県や他県の公立小学校の社会科や理科の授業、附属小学校の授業を観て授業分析を行って協議をしたり、指導案の書き方や読み取り方を講義したり、授業づくりの1つの方法として、素材を教材化する技術を伝え、それを活かした授業づくりを課題として取り組ませ、その成果について相互発表を行ったりと、様々なアプローチで多角的に「授業」に迫れるように授業展開を工夫した。

第2クォーターに入ると感染状況も落ち着き、対面授業が許可された。6月末には近隣の公立小学校の許可を得て、実際の公立小学校の授業の様子を見学させてもらう時間を組み込んだ(写真1、2)。



(写真1) 公立小での授業見学の様子



(写真2) 授業後の協議の様子

当日は、4年生の道徳の授業を見学させていただいたが、授業者が本学部小学校サブコース卒業で初任者であったため、履修生は親近感を抱くとともに、自分が2年後に教壇に立つ姿をイメージしながら、授業を見学することができているようであった。また、授業見学の際には、教師の視点、児童の視点、教材や教具の視点など、いくつかの「授業を観る視点」を与えて臨ませていたので、参加者は、その視点ごとに分類しながら焦点化して授業観察を行うことができていた。遠隔授業の際に繰り返し様々なクラスの授業を分析していたことも活かして、実際の授業をリアルに見学できたことでイメージが湧きやすく、より深く授業を観ることができたようである。また、授業中の教師の展開のリズムや雰囲気、教師の間の取り方や気になる児童への支援、全体と個をどのように見分けながら指導しているか、発問のタイミング、児童の相互作用やグループでの活動の役割分担や集中力の持続・・・など、ビデオやオンラインで切り取られ、良いように作られた授業動画では到底分からない本物の授業を丸ごと観ることができたことは、教育実習を目前に控えた履修生にとって非常に意義深い内容となった。

二点目は、ICTを活用した授業づくりを学校現場と連動して行うことである。コロナ禍もあり、前倒して今年度より実施されたGIGAスクール構想の1人1台タブレットは、遠隔授業やオンライン授業をするためだけに配付されたのではない。一番大切なのは、対面の各教科の授業の中で、如何に適切かつ効果的にタブレットを活用した授業ができるかである。これから教員を目指す者には、タブレットやIT環境を駆使した授業づくりができることが求められ

ている。本授業でも、そのことを強く意識してICT、タブレットを活用した授業づくりの講義を第11回～第15回までに取り入れた。

まず、ICTやプログラミング教育の実際について学ぶために、松山市教育研修センター事務所指導主事で、松山市内小中学校のタブレット・ICT環境についての取りまとめを行っている小田浩範先生にゲスト講師として来ていただき、「これからの学校教育とICT」「プログラミング教育」についての2回の講義を実演や演習も含めて講義していただいた(写真3、4)。この講義により、実際の学校現場でどのようにICT環境が整備されているか、公立小学校教員が求められているものは何か、タブレットやICT機器を用いた授業づくりはどのようにすればよいのか、などについて直接聞き、学ぶことができた。



(写真3) ゲスト講師によるICT教育の授業(講義)の様子



(写真4) 機器を用いたプログラミング教育の授業(演習)の様子

さらに今回の授業では、最終課題を兼ねて、「プログラミング的思考を踏まえた授業(単元)

づくり」として、1人1授業（単元）を考えさせるようにした。具体的には学年や教科は履修者の希望や関心を優先し、自由に設定することにした。その中でプログラミング的思考を育成する単元や内容を洗い出し、導入や展開を工夫しながら授業案を完成することとした。履修者の多くは9月に控えている附属小学校の教育実習で配属された学年の授業づくりに取り組むことを選んでいた。これだけでも十分自分ごととして授業づくり、教材づくりに取り組めるが、今回はより実際の学校現場に近い感覚で取り組ませるために、「実際の公立小学校の先生に、自分が考えた授業案を提案する」という活動を取り入れた（写真5、6）。



（写真5）公立小学校の先生に考えた授業案を提案している様子（1）



（写真6）公立小学校の先生に考えた授業案を提案している様子（2）

近隣の公立小学校と連携してカリキュラムを作成し、全面的な協力を得て実施することができたのだが、相手方の公立小学校としては、自身の校内研修に位置づけられたようで、全教員が本学に來学して対面で、学生の提案を聞き

て意見交換しながら、教材づくりを行うという画期的な授業を行うことができた。学生にとっては、自分のアイデアや考えたことを実際の教員からコメントをもらえることで刺激や意欲をもらえると同時に、自分が考えた授業案が実際の学校現場で使われるかもしれないという期待感や達成感を感じることができる機会となった。ここで提案した授業案は、実際に2学期以降、その学校の先生方で修正が加えられ、いくつかが実践されたとのことである。教員になりたいと志望して本学部で学んでいる意義が見出せる授業となったのではないだろうか。

②授業評価について

授業終了後に採った、DPとの対応調査の結果を以下に示す（表1～4）。授業終了後の実施となったため、履修生20名のうち、17名の回答となった。

（表1）知識・理解に関するアンケート結果

知識・理解 ：教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。	
とてもそう思う	10人
ある程度そう思う	6人
あまりそう思わない	1人
授業の内容・目標がこのDPとは無関係である	0人

（表2）技能に関するアンケート結果

技能 ：教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている。	
とてもそう思う	11人
ある程度そう思う	6人
あまりそう思わない	0人
授業の内容・目標がこのDPとは無関係である	0人

（表3）思考・判断・表現のアンケート結果

思考・判断・表現 ：教育現場で生じているさまざまな現代的諸課題について、専門的な知見をもとに、その対応方策を理論に基づいて総合的に考え、その過程や結果を適切に表現することができる。	
とてもそう思う	9人
ある程度そう思う	7人
あまりそう思わない	1人

授業の内容・目標がこの DP とは無関係である	0人
-------------------------	----

(表4) 興味・関心・意欲, 態度の結果

興味・関心・意欲, 態度 ：教師としての使命感や責任感を持ち、自己の課題を明確にして理論と実践とを結びつけた主体的な学習ができ、自主的に社会に貢献しようとする。	
とてもそう思う	9人
ある程度そう思う	8人
あまりそう思わない	0人
授業の内容・目標がこの DP とは無関係である	0人

上記の結果から、どの項目においても、概ね学生にとって学びのある授業であったことが分かる。表1と3で「あまりそう思わない」と回答した学生が1名ずついたが、同じ学生である。この学生はもともと ICT 機器を使いこなしており、基礎的な技術を身に付けていることもあったため、そのような回答になったと推察されるが、実際の授業では非常に意欲的に取り組み、上述したプログラミング的思考の授業案を先生方に提案する授業では質の高いアイデアを考え、積極的に説明する姿が見られた。この学生のアンケート結果で興味・関心、意欲・態度の項目は「とてもそう思う」と回答していたことからそれが裏付けられる。

本授業はややもすれば、授業づくりの理念や考え方、基礎的な事項についての講義一辺倒の授業スタイルに陥ったり、指導案を細かく読み取って、その文言について検討するような授業本来の目的とはかけ離れたものになったりしがちであるところを、「現場が一番」「授業はライブ。ライブは体感しないと意味がない。」ということ意識して授業の中に、積極的に取り入れることで改善できた部分も多かったように思う。これは、私自身が22年の小中学校教員・指導主事の経験を持つ、実務家教員であったからこそできたことだと思う。各校には旧知の先生方が多数おり、連携を取りやすかったという面もあると思う。

その点で言えば、実務家教員が実施する授業に対して学生が求めていることに少しは応えられているのではないだろうか。授業とは何かという本質の部分を理論的だけでなく、実践的

に学ぶスタイルの授業、とりわけ実際の学校現場に足を運んで、そこから直接学べる授業スタイルを確立していきたい。

一方で課題もある。今回は協力してくれる近隣の公立小学校があったからこそ、自 t 減で来た面も大きい。ましてやコロナ禍である。受け入れ先が対応できない場合に、本授業をどのように実のあるものにするか、常に検討しておく必要がある。まさしく WITH コロナの実践的授業スタイルを創り上げるべく、研鑽を積まないといけないと感じている。その際、有効になるのがやはりオンラインの活用であろう。ますます発展していく ICT 機器の活用を模索しつつ、授業の質を高める研究を進めていきたい。

3. 地域ともにある大学を体現するために

今回、プログラミング的思考の授業案を近隣の公立小学校とコラボして行うという授業を実施したが、その学校が抱えている課題を解決する意味合いでも行われた。つまり、教員研修のマンネリ化打破である。この学校に限ったことでなく、全国の多くの学校で、校内研修の形骸化、忙しさということを理由

(言い訳)にした教員の研修忌避の傾向は根深いものがある。教員の研究と修養は教育公務員特例法で定められた教員の責務である。教員免許状更新講習が廃止され、新たな研修の在り方が模索されている今、地域の教員養成大学としての役割は大きいものがある。そのような中で、今回の本授業のように、互いの目的を合致させ、Win-Winの関係が構築できるような授業を開発していくことが求められていると考える。実際にこの公立小学校からは次年度も、より綿密に計画して継続的に実施していきたい、という声をもらっている。恐らく他の学校でも同様の傾向であろう。それは引いては教員を目指す学生の質を担保することに繋がっているのだと思う。

まだまだ課題の多い授業ではあるが、可能性も見出すことができたので、次年度以降、他の授業においても、より実践的で地域に密着した授業の構築を目指して改善・努力していきたい。